

Resident Evil FrontLine

廻瀧

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

交わることの無い2つの世界。生物災害との戦いの果てに散った男達は異なる世界へと飛ばされる…そこは少女を模した人形達が戦う世界だった。

目次

第1章 交わる2つの世界と3つの刻々

鷲とA R 小隊 | 1

隼と404小隊 | 16

鷲と隼の出会い | 37

第1章く交わる2つの世界と3つの刻く

鷲とAR小隊

2017年12月14日、北米某所のコネクション研究施設跡のとある一室にキーボードを叩く音が響いていた。

「…ダメか、このデバイスもシヨートしている、厄介なことをしてくれたな。」

耐BCベストの上にチェストリグを着込み、特徴的なガスマスクを着用した男が1人ごちる、傍らには大柄なSG「アルバート・W・モデル02 トールハンマー」が置いてある。

「隊長、此方も映像ディスクや資料などはすべて持ち出されてしまっています、やはり我々が来ることを想定していたのでしよう。」

ドアが開き、同じ装備をした隊員が男に声を掛ける、彼等はアンブレラ社特殊事案処理チームと呼ばれる、嘗てのアンブレラの贖罪を目指す、新生アンブレラ社の特殊部隊の隊員だ。部下に声を掛けられ、隊長と呼ばれた男は振り返り。

「そうか、やはり一筋縄では行かなそうだな、この施設はもうもぬけの殻だろう。」

そして隊長はヘルメットのヘッドセットを操作し。

『本部、此方アルファチーム、イーグル、施設は既に放棄された後のようだ、これ以上の調査は無意味と判断する、オーヴアー。』

〃此方本部、了解、直ちに帰還せよ、アウト〃

『イーグル了解、アウト』

短い通信を終え、トールハンマーを手に取り、イーグルは全隊員へと通信を入れ、全員が集まると部屋を出て施設を歩きだす。

「隊長、貴方は嘗て旧アンブレラの人間だったという話は本当ですか？」

施設のエントランスホールに差し掛かると、1人の隊員が声を上げる、その声にイーグルは少し重い声で返した。

「無駄口を叩いてる暇はないぞ、放棄されているとはいえ、いつ奴等が沸くかわからないんだ。索敵は怠るな。」

「…すいませんでした。」

叱責され、隊員は少し気落ちした口調で謝罪する、その時だった。

づあああああ…

うめき声が聞こえ、開いたドアの一室からカビ人間のような怪物、「モールドレッド」がよろめきながら現れた。

「総員！密集隊形！モールデッドを近づけるな！」

イーグルが声を上げて全隊員に告げる、隊員が迅速に密集隊形を組む、それとほぼ同時にホールの至る所に生えたカビの塊から多数のモールデッドが這い出てきた。

「ファイア！」

イーグルの指示で全方位に展開した隊員のトールハンマーが火を吹く、フルオートで発射された12ゲージ弾は瞬間にモールデッドを粉碎する。

だが…

「隊長！数が多過ぎます！このままではジリ貧です！」

確かにモールデッドを倒してはいるがモールデッドはカビの塊から続々と這い出てくる、数で押されてはどうしようもない、事実少しずつ、モールデッドが迫って来ている。

「チツ、今からグレネードを投げる！全員その隙を駆け抜けろ！」

イーグルは声を荒げ、ベストに付いたM67グレネードを取り出す、ピンを外し、手で少し遊ばせ、ドアへと続く道を塞ぐモールデッドに投げ込む。狙い通り、グレネードは大爆発を起こし、その道に隙間ができる。

「今だ！行け！」

隊員へと指示を飛ばし、最後にイーグルも駆けだす、しかし…

うげえええ…

ああああ…

肥満体のモールデッド【ファット・モールデッド】

腕が鋭い刃へと変異した【ブレード・モールデッド】

四つ足の【クイック・モールデッド】が姿を現わす。

特殊変異体のオンパレード、今の状況では最悪だ、イーグルは最後の隊員が部屋の外へ出るのを一瞬見つめ、覚悟を決める。

「!?、隊長!何をするつもりですか!!」

「行け!お前らは脱出して本部に報告しろ!」

ドアを叩くように閉める、そして近くの棚を倒し、完全にドアが開かないようにした。「さて…どこまで持つか…。」

トールハンマーの残弾数は今装填しているマガジンで最後、セカンダリーのゲイルラプター01Eは残り2マガジン、グレネードはついさつき投げ込んでしまった。

うあああ!

クイック・モールデッドがその俊敏な動作で飛びかかるが腿のホルスターから流れるようにゲイルラプター01Eを引き抜きその頭部に狙いを付け、引き金を引く。

銃口から、50AE弾が吐き出されその威力はクイック・モールデッドを吹き飛ば

す。

「うおげえええ!!」

ファット・モールデッドの吐き出す液体がベストを掠める、すると焦げたような音になり、ベストが焦げ付く。

「チツ、これは被つたらやばいな。」

ファット・モールデッドにゲイルラプター01Eを撃ち続けるがその背後からブレード・モールデッドが飛びかかって来た。

「しまっ……!」

腕の刃がイーグルの脇腹を切り裂く、分厚いベストを突き抜け、肉を抉られる。

「ぐああ!!」

激痛にマスクの中で顔を歪めながらもゲイルラプター01Eをブレード・モールデッドの頭部へ撃ち込む。

「うああ……」

短い悲鳴を上げてブレード・モールデッドは力尽きるように倒れこむ。

「はあ……はあ……」

痛みに耐えながら、ベストのポケットから回復アンブルを取り出し、左腕に突き刺す。

「うおげええええ!!」

ドストスと重い足音が響き渡り、その方向を見遣ると頭と手が無いファット・モールデッドが迫って来ていた。

「うおっ!!」

その巨体に弾き飛ばされ床に倒れこみながらもゲイルラプター01Eを構え、ファット・モールデッド2体のそれぞれ両足を撃ち抜く。

「うおおお…」

「バチュン!と音を立ててファットモールデッドが破裂した。」

「なんとかなったか…。」

深い息を吐き、近くの壁にもたれ掛かる、血を流し過ぎた為か意識が遠のいて来る感覚に襲われる。

「AR小隊Side」

「これで最後ね。」

荒れ果て、廃墟が立ち並ぶ町、そこで長髪の黒髪を靡かせ、一部を緑色に染めた少女が声を発する。その顔立ちは整っており、その手に持つ銃と合わせても様になる。

「M4、周囲に鉄血の反応は無し、任務完了だ。」

「ありがとう、姉さん。」

M4と呼ばれた少女に声を掛けたのは同じような黒髪に三つ編み、黄色のメツシユが入り、右眼に眼帯を着け、大きなガンケースを背負った少女だった。彼女の言う通り、2人の周りには鉄の残骸らしき物が散乱している。彼女達は人間ではなく、戦術人形と呼ばれているアンドロイドであり、PMC《グリフィン&am p;クルーガー》の誇る精鋭部隊、AR小隊のメンバーである、残りのメンバーである2人はピンクの長髪をワンスайдアップで纏めたST AR15。金髪に赤いメツシユが入り、特徴的なヘッドギアを着けたM4 SOPMOD IIだ、それぞれ、AR15は見張り、SOPMODは戦利品を集めに行っている。

「作戦は完了、皆、帰還しますよ。」

「えー！まだコレクション集め終わってないよー！」

M4が帰還の指示を出すとSOPMODが不満の声を上げる、コレクションと言うが、その手には明らかに目玉に見える部品や、オイルにまみれた腕の部品など一般的に見たらコレクション？となるようなものを持っていた。

「SOPMOD、あまりワガママを言ってはダメよ。」

「ハハッ、私も早くビールが飲みたい所だな…ん？」

AR15がSOPMODを咎める中、M16が何かに気付き、声を出した。

「姉さん、どうかしましたか？」

M4が振り返り、尋ねた。

「M4、近くに生体反応だ、反応からおそらく人間だろう。」

「人間？そんなはずは無いわよ、ここは鉄血との最前線じゃない。」

「だが確かにこの先に反応があるんだ、もし民間人なら救助しなければならぬだろう？」

「どうするM4？」とM16が聞くとM4が口を開く。

「その反応の場所へ行きます、M16の言う通り、民間人ならば救助しなければなりません、仮に鉄血の残党なら殲滅するのみです。」

M4は搜索すべしと判断し、指示を出す。

—————

AR小隊が発信源を辿り、着いた先はとある廃墟だった、見た目からしてなにかの施設だったであろう建物はすっかり風化してしまっている。

「ここですね、皆さん、索敵は怠らないように。」

「了解。」

M16が先頭になり、銃を構え、油断なく進んで行く、どうやら発信源はかなり奥のようだ。

「うええ…埃っぽいよー。」

「ホントね、早く帰って休みたいわ。」

廃墟内を進む中、SOPMODが不満の声を上げる、確かに、長い間放置されていた為か砂煙や埃が歩くたびに舞い上がる、AR15も銃を構えながら同意する。

「どうですか？姉さん。」

「このドアの先だ、反応は動いてない、間違いなくこの中だろう。」

M16が眩き、4人は一斉に構える。

「3、2、1…Go！」

M4の号令と共にM16がドアを蹴破り、4人が突入する、そこに居たのは…。

「！、民間人ではなさそうだな。」

「ええ、服装もさることながら、側の銃、見たことない銃だけど少なくとも民間に流出しているものではなさそうね。」

壁にもたれ掛かるように倒れているのは明らかに民間人では無い装いの人間だ、全身を分厚いベストや多数の予備弾薬用のポーチが付いたチェストリグに身を包み、そして何より特徴的なのは顔の全面を覆うマスク、最初は人権団体の人間かとおもったがここまで充実した装備を人権団体が用意はできないだろう。

「脈はあり、原因は…!?、姉さん、すぐに本社に連絡を！この人、脇腹に裂傷が見られま

すー！」

「わかった！」

M4が声を荒げ、M16は無線を取り出し、グリフィンに連絡を入れる。

『こちらM16、負傷した人間を発見、至急、救援を要請する。』

「ねーねー！このポーチに止血帯とか入ってるよー！」

SOPMODの声が聞こえ、その視線の先には人間の左腿のポーチを開け、笑顔を浮かべるSOPMODが居た

「SOPMOD、あまり勝手に触らないようにしなさい、でもお手柄よ。」

AR15がSOPMODに注意するが今の状況では有り難いものだ、M4はSOPMODの見たつけた止血帯、消毒薬を使い、手早く処置を施す。

「ぐっ……ううう……」

人間が一瞬、苦しそうな声を上げるが、すぐ先程よりも幾分か和らいだようだ、マスク越しの為、表情は見えないが呼吸も安定してきていた、落ち着いた所で4人は改めて、その人物を観察した。

胸に2本のマガジン、グレネードや予備弾薬が入っていたであろうポーチの中は空、それぞれ4色の液体が入ったシリンダー、先程の簡易医療器具が入っていた左腿のポーチ、反対には大型のHGの入ったホルスター、あまり見かけない形状の顔全体を覆うマ

スク、何より特徴的なのは側に落ちていたであろう銃だ。

「これは…少なくともグリフィンの保有している銃では無いな。」

M16が慎重にその銃を持つ、先端がギザギザの銃口、ハンドガードはかなり肉抜きされていてその重厚な見た目よりも軽く感じる、ダンプポーチに入っていたマガジンはハーフスケルトンとなっており、口径からから見ても、12ゲージ弾が装填されていることからこの銃はSGだろう。

「M4、やはりこの人間は只の民間人ではなさそうだな。」

「姉さん？何故そう言い切れるのですか？」

この人間は民間人では無い、M16の確信した様な言い方にM4は尋ねる。

「この文字を見てみる、」

《UMBRELLA CORPORATION》、こんな名前のPMCは聞いたことが無いし、この様な形状のSGは見たことが無い。」

普通では無い服装に装備、見たことも無いSG、実在しない会社名、考えれば考えるほど謎が深まる、4人はどうするべきか悩んでいると…

「ツ…ハ、ハは…？」

その声に4人は銃を構え、振り向く、先程まで気絶していた人間が目を覚ました様だ、マスク越しの為、声がかくぐもっているが声音からして男性だろう。

「な…!? 待て！ 少なくともこちらに敵意はない！ 銃を下げてください！」

男の声に4人は油断無く銃を構え、そしてM4が尋ねる。

「貴方の所属と此処に居た経緯を話してください、それと武器を地面に置く様に。」

「了解した、これで良いか？」

M4の鋭い声に男はタクティカルナイフとスモークグレネード、そしてホルスターのHGをゆつくり地面に置くと、両手を上げ何も持っていないとアピールする。

「改めて、貴方の所属と経緯を話して下さい、決して誤魔化す様な行為はしないことです。」

男が武器を置いたことで4人も銃を下げる、そして男が口を開く。

「俺はアンブレラ社特殊事案処理チーム、アルファチーム隊長、ハルキ・ブルースペース、コードネームはイーグルだ、コネクションの研究施設を捜索中、モールデッドの群れに襲われ、交戦、ブレードに脇腹をやられ、意識を失っていた、君達こそ何者だ？ ここはアンブレラが立入禁止区域に指定していたはずだが？」

「アンブレラ？ コネクション？ それにモールデッドなんてそれらしい物は見かけてないですか？ 誤魔化しはすると言ったはずですよ。」

AR15は顔をしかめながら否定する、するとイーグルと名乗る男は一瞬考える仕事を。

「アンブレラを知らない…？それにモールデッドが居ないだと？君達こそ所属を教えてくださいると有難いんだが、どうも話しが噛み合っていない気がする。」

イーグルの言葉にARR15は何を言っているのかわからないという表情を浮かべる、SOPMODは理解していないのか頭に疑問符を浮かべながら聞いている。

「私達はグリフィン所属、ARR小隊、私は隊長のM4A1です。」

「私は副隊長のM16A1だ。」

「SOPMODIIだよ！よろしくね！」

「STAR15よ。」

4人の名前と所属を聞くもののイーグルは信じていることができなかった。

「M4にM16？コードネームか何かか？、それにグリフィンなんてこちらも聞いたことがないぞ？」

お互いに何一つ聞いたことがないとことだらけとなり、気味悪い空気が流れる。

「仕方ありません、それとハルキさんでよろしいですか？貴方をグリフィンへ連れて来るよう命令を受けました、抵抗はしないでください、こちらも出来れば危害は加えたくありません、良いですか？」

M4の提案にイーグルは溜息を一つつくと素直に提案を受け入れる。

「ああ、わかった、それとその銃は丁重に扱ってくれよう。」

イーグルはトールハンマーを指差して告げる。

「わかっている、この銃は私が責任を持って預かるう。」

M16がトールハンマーをしつかりと持ち、ガンケースにしまう。

「ねね！そのマスク取ってよ！自己紹介したんだし素顔も見たい！」

無邪気な笑顔を浮かべながらSOPMODがマスクをペシペシと叩きながら言う。

「わかったわかった、だから叩くのはやめてくれ。」

SOPMODの人懐っこさに毒気を抜かれてイーグルはヘルメットとマスクを外す。

「ほー、中々良い男じゃないか。」

M16がお世辞抜きに感嘆を漏らす、マスクの下は黒の短髪にやや赤みがかかった瞳、全体的に整った顔立ち、とても銃を握りしめる男とは言い難いがその瞳には確かな覚悟や闘志が宿っている。

「そうか？あまりその様な評価は受けたことが無いからな……。」

その後、5人は互いの情報交換をし何事もなく指定のRZ（ランディングゾーン）へと到着する。

—————

大きく異なる世界、若き大鷲はその世界で何を見るのか、鉄血とは何か？鉄血は何故

人類へその牙を向けたのか？イーグルがこの世界へと来たその理由は？

そしてもう1人、気高き隼が同じくこの世界へと足を踏み入れる、鷲と隼、2人の出会いはもう少し先の話、そしてそこから物語は動き出す。

隼と404小隊

2013年6月30日、中国、今中国は大規模なバイオテロの脅威に晒されていた、ネオアンブレラが所有する超巨大空母より、カーラ・ラダメスの研究により発見された、新型のウイルス兵器であるCーウイルスを搭載したミサイルがターチイに撃ち込まれ、ウイルスが蔓延、一晩でターチイの町はバケモノが闊歩する、地獄へと変貌した。

「ヘレナ！無事か!？」

ターチイの一角、そこで茶髪に片目を隠した男は声を張り上げる。

「ええ！無事よレオン!」

ヘレナと呼ばれた女は応える、しかし状況は芳しくなく、寧ろ絶望的だった。

「チイツ、武器が効いてない…どうすれば…」

レオンと呼ばれた男、本名をレオン・S・ケネディ、ラクーン事件を生き抜き、数多のバイオハザード事件を解決し、合衆国のエースエージェントへと成長した生きる英雄の1人である、そんな彼を持ってしてもこの状況を打破するのは難しかった。

「弾薬も少ない…このままではやられる。」

レオンはHG（ハンドガン）「センチネルナイン」を構えながら呟く、持っていた武器

は粗方使い切ってしまった、ヘレナも弾薬が残り少ないSG「ハイドラ」を撃ち込むが目の中の恐竜のようなバケモノには大した効果は認められない。

目の前の恐竜、このバイオハザードの黒幕であるデイレック・C・シモンズが強化型C-ウィルスを投与され変異した姿である、(以降シモンズ)最早ヒトとしての原型等留めておらず只目の前の獲物を喰い殺す事だけを目的としてシモンズはレオン達に襲い掛かる。

「レオン！こつちもほぼ弾切れよ！」

「ヘレナ！君は逃げるんだ！このままでは2人ともやられる！」

ヘレナだけでも逃がそうとレオンは少ないセンチネルナインをシモンズの目や急所付近を狙い撃つ。シモンズは微かによろめき、レオンへとその視線を向ける。

「さあ、来いシモンズ！」

レオンはセンチネルナインを構える、シモンズがその顎門を大きく開けてレオンの元へと駆け出した瞬間、低い銃声が鳴り響く、レオンがその音の発信源を見遣るとジープが一台とヘリが飛んでいた。

—————

ファルコンside

「こちらファルコン、ポイントRを通過、道中に妨害等は無し、作戦は順調に進行中、オー

ヴァー。」

「こちらHQ、現在のルートを維持し、ポイントスピードを目標せ、オーヴァー」
「ファルコン了解、アウト」

レオンとヘレナがシモンズと死闘を繰り広げているエリアから少し離れた場所、乗り捨てられ、炎上している乗用車やトラック等が散乱している道路を走るジープの運転席にて通信を行なっているのはヘッドバンドのようなイヤーマイク、口元だけを覆うバラクラバを装着し、タイトな戦闘服に身を包んだ薄紫色の髪をした男だ、助手席には彼のブライマリーウェポンであろう入念にカスタムされたUMP9が置いてある。

「それにしても酷い光景だ…あの時のラクーンを思い出してしまふな。」

片手で左肩に着いた《BSAA》のワッペンを握り締め、1人呟く、ファルコンと呼ばれたこの男はこのBSAA創設に伴い、スカウトされる前に所属していた、SPEC OPS時代、ラクーン事件解決の為、地獄の町を奔走していた時を思い出していた、そこで出会ったレオンは大切な戦友であり、良き親友であった、BSAAにスカウトされた際はバイオテロの最前線で戦えると思い、高揚したがやはり実際の現場を見るのはいつまでも慣れる事はない。

「クリスやピアーズ、マルコ達は無事だろうか…まあクリスは死ぬ光景があまり浮かばんが…ん?」

別働隊であるクリス・レッドフィールド率いるアルファチームの身を案じ思わず口を零す、その時、曲がり角の向こうで銃声が鳴り響き、不審に思ったファルコンはジープを止め、ジープの後部座席に着けられた銃座の下からドローンを取り出した。

「生き残りの可能性がある、ゴーレム、こちらファルコン、銃声が聞こえた、ドローンを飛ばすがヘリからの確認を要請する。」

『こちらゴーレム、了解、』

上空を飛ぶ同じくB S A A所属のヘリパイロット、ゴーレムへと要請を飛ばす、

『見えたぞファルコン、茶髪の男が1人と同じく茶髪の女が1人だ、望遠レンズから撮った映像を送る。』

ファルコンの端末にゴーレムからの映像とドローンからの映像が送られる、その映像を見たファルコンは驚いた。

「レオンじゃないか！ゴーレム！この映像は確かなんだな！」

『おいおい！落ち着けよファルコン、いつも冷静なお前らしくないぞ？』

いつもと様子が違うファルコンにゴーレムは慌てて宥める。

「すまん、だが俺は2人の救援に向かう、ゴーレム、お前達はそのままポイントスペードを指せ。」

『なーに言ってるんだ、俺達も行くぜ？その慌てようだと大方知り合いか何かなんだろ？』

へりからの援護くらいはしてやるさ。」

ゴーレムの言葉にファルコンは微かに笑みを浮かべた。

「…すまん、恩にきる。」

そしてファルコンはジープのアクセルを深く踏み込み、レオン達の元へと急行した。

—————

「うおお!!」

シモンズが吹き飛ばしてきた瓦礫を間一髪で回避したレオンは近くのタンクローリーを撃ち、シモンズの足止めを試みる。

グオオオ!!

狙い通り、シモンズは怯み数歩程後退りをした。

「いよいよヤバイな…ハッ、泣けるぜ。」

もう弾も僅かしか無くいよいよ諦めかけたその時。

「レオン!!無事か!」

瓦礫の向こう側からジープが勢いよく飛び出し、運転席のファルコンが叫ぶ。

「オイゲン!?!オイゲンなのか!?!」

嘗ての戦友であり親友である男の顔を見てレオンが驚愕の声を上げる。バラクラバで隠されてもその顔を見分けるのは簡単だった。

「何故ここに？それに何だあれば？」

レオンはファルコン：オイゲンに説明をしようとしたがそんな猶予は残されていない。レオンが口を開く前にファルコンが後部座席を示し。

「まあ良い、2人とも、乗れ！」

レオンとヘレナが後部座席に飛び込むように乗り込むとファルコンはアクセルを全開に踏み込み、ジープを急発進させる、当然、シモンズもその強靱な脚で

ジープの追跡を行う。

「もつとスピードは出ないの!？」

ヘレナが機銃をの引き金を引きながら叫ぶ。

「悪いな、これが限界だ！」

ファルコンの言葉に偽りは無い、シモンズのスピードが想定よりも早く、3人の人間に武装を積み込んだジープではどうしてもスピードは出ない。そしてシモンズが近くの車を啗えジープへと放り投げる。

「うおおお!？」

ファルコンが思い切りブレーキを踏み込んだ事でどうにか軽い衝突で済んだがシモンズがすぐ近くまで迫って来る。

「レオン！ヘレナ！兎に角撃ちまくれ！ヤツを近づけさせな！」

言葉通り、レオンとヘレナはシモンズの頭部に機銃を撃ちまくる。ヘリからも同様に機銃弾の援護も開始され、シモンズは大きく仰け反る。

「今だ！」

勢いよく方向転換を行い、空いた道路を再び全速力で走る。

「良いぞ！そのまま弾丸を喰らわせてやれ！」

何とか奮戦するも遂にシモンズがジープのサイドに噛み付いた。

「ヤバイ!!レオン！ヘレナ！飛び降りろ！」

このままではマズイと直感したファルコンは2人に飛び降りろと叫ぶ。

「ヘレナ！飛び降りるぞ！」

レオンがヘレナを抱き抱え、ジープから飛び降りる。

「うおおお!？」

レオン達が飛び降りると同時にシモンズは掬い上げるようにジープを投げ飛ばす。

「ファルコン!？」

ヘレナはファルコンの身を案じ声を荒げる。

「大丈夫だ！お前らは早く行け！」

ファルコンはレオン達に大丈夫だと応えるが、ファルコンの乗っていたジープは何とか走れる状態ではあったがフロント部分が凹み、ブレーキ側の脚が挟まってしまってい

た。

「…ここでレオン達を死なせる訳にはいかないな…」

フツと微笑を浮かべファルコンはある決断をくだす。

「レオン、何があつても振り向かずには走れ！俺がシモンズを足止めする！」

ファルコンはアクセルを踏み込み何とシモンズに向かって突貫していく。

「オイゲン!?何をしている！やめろ！」

ファルコンの行動を理解したレオンは悲痛の顔を浮かべファルコンに叫ぶ。

「レオン！絶対世界を救え！良いな！俺には出来ないがお前ならできる！」

それがファルコンの最期の言葉だった。

ドオオオオン!!

ファルコンのジープはシモンズの足元へ衝突し、大爆発を起こした。

「オイゲエエエエエエ（ファルコオオオオオオオン）!!!」

レオンとヘレナの悲痛な叫びが木霊する。此処に英雄を護った歴史に語れる事の無い、誇り高き隼は散って逝った。

筈だった…

フアルコン side

「う、ううん……？ 此処は？」

フアルコンは日差しを感じ、目を覚ます。

「何だ……あの世っていうのはこんな荒廃した世界だったのか？」

確かに死んだ筈、そう思ったフアルコンは周りに広がる廃墟や荒野を見て溜息をついた。

「ごちゃごちゃ考えても仕方ない、周囲を探索してみるか。」

何故か側には装備がそのまま残っていたので回収し、周囲をクリアリングしながら廃墟を出る。

「まるで核が落ちた後みたいだな、それにしてもマスクを装備してて良かった。」

とてもマスクを外しての呼吸ができるとは思えないほどの砂塵が舞う中フアルコンはUMP9を構えながら廃墟の街を進んでいく。

| | | | |

???
side

「はあ……はあ……」

とある廃墟の中、一人の少女が脇腹を抑えながら歩いていて、その脇腹からは血のよ
うな液体が流れている。

「油断した……まさか待ち伏せを喰らうなんて……」

明るい茶髪をツインテールに結び、右目に切創が付いた可愛らしい顔立ちをした少女
だ、その顔は今は痛みに歪んでいる。

「45姉……助け……」

弱々しく眩き、少女は倒れんできました。

—————

ファルコンside

「しかし人っ子一人いない……あるのは鉄屑だけだな。」

ファルコンはさつきまで居た街とは別の街に辿り着いたが相変わらず人が居なく、変
わったのは鉄屑が転がっているくらいだった。

「ドローンでも飛ばせば周囲がわかるか、なぜ気づかなかったのか……」

一旦落ち着き、回収したドローンを真上に飛ばす。

「ふむ、ダメだな、周りは同じく荒野と廃墟だけか……この街も外れか……ん？」

ふと映像の隅の方に何かが映り込む、不審に思ったファルコンはドローンを操作し近
づける。

「おいおい…何で女の子が倒れてるんだよ…」

ファルコンはドローンを戻し少女の元へ向かう事にした。

—————

「さて、ドローンの位置情報ではこの辺りに…」

その後ファルコンは少女を発見した場所付近へ移動し、周囲を見渡す。

「居たな、って怪我してるのか、それに血の跡がある、かなり無茶をしたらしいな。」

少女の歩いてきた道には血の跡が点々とありどうやら負傷した状態で歩いていたの
だろうとファルコンは考える。

「まずは止血だな、緊急だから勘弁してくれ…よつと。」

ファルコンは少女をお姫様抱っこで抱え、近くの廃墟に入る。

「よし、止血完了、包帯は無いか…」

止血処置を終わらせたファルコンは近くに転がっていた椅子に腰掛けUMP9のメ
ンテナンスをしながら少女が目覚めるのを待つ。

「う？此処は…？」

あれから数分程で少女は目を覚ました。

「目が覚めたか。」

「!？」

ファルコンが少女に声を掛けると少女は咄嗟に身構える。

「お前は!? アイタタ…」

「おいおい、無理はするな、まだ止血したばかりだぞ?」

少女は脇腹を抑え踞り顔をしかめ、ファルコンは無理はするなと声を掛ける。

「これ…貴方がしてくれたの?」

少女は脇腹のガーゼを指差し尋ねる。

「ああ、包帯は生憎持ち合わせていなくてな、すまんが勘弁してくれ。」

ファルコンは少し申し訳無さそうに言う。少女は笑顔を浮かべ。

「ううん、ありがとうね、それにその銃、少し形が違うけどUMP9でしょ?」

「へえ、良く分かったな、おっと、自己紹介がまだだったな、俺はオイゲン、オイゲン・

Y（ユリ）・ボーデヴィツヒ、コードネームはファルコン、まあオイゲンでもファルコン

でも好きに呼んでくれ、君の名前は?」

ファルコンも笑顔を浮かべ少女に名前を聞く。

「UMP9! 9（ナイン）って呼んでね!」

「UMP9? 本当に本名なのか? そう言えば側に落ちてた銃もUMP9だったな、まあ

それよりもだ、9は何故あそこで倒れていたんだ?」

大方コードネームか何かだろうとファルコンは考え、一番の疑問を9に問いかける、

すると9は急に涙目になり。

「そうだ！45姉達とはぐれちゃったんだ！どうしよう…」

「落ち着け、まずははぐれた状況を説明してくれないか？」

取り乱す9を宥め、ファルコンは軽く背中をさする。

「うん、私達は404小隊って言う小隊を組んでいて、作戦行動中に鉄血の待ち伏せを受けて私だけのはぐれちゃったんだ。」

断片的ではあるがおそらく負傷したせいで鉄血とやりに集中的に狙われていたのかもしれない、弱い敵や負傷した敵から狙うのは戦場の定石だ。

「それなら集合地点やRZ等はわかるか？それと無線などもあれば有難い。」

ファルコンが尋ねると9は腰に下げたバッグから地図を取り出す。

「私のはぐれた場所は此処、そして指定のRZは一番近い所でも此処だね。」

9が指差す二ヶ所は森を隔て、そこそこ離れている、おそらく無我夢中で逃げていたのだろう。

「ふむ、無線は有るか？」

ファルコンは無線の有無を尋ねる、彼の無線を使っても良いがそれだと通信相手に不審に思われてしまう為最終手段だ。

「ううん、私達戦術人形達は基本、人形間の通信規格があるから無線は基本持たないん

だ。」

首を横に振る9を横目にファルコンは暫し思案する。戦術人形、鉄血、人形間の通信規格、聞いたことのない単語の数々にUMP9、そして戦術人形を名乗る少女、少なくともファルコンはどれも聞いたことはない。

「わかった、その通信規格は使えないのか？」

今は生き残ることが最優先だ、一般人ならば取り乱すだろうが、歴戦の兵士であるファルコンは余計な考えは頭から消し去り、生き残る為の手段を模索する。

「実は攻撃を受けた時そのシステムに一部エラーが出てるんだ、だから下手をすると鉄血に位置がバレちゃうと思う。」

通信ができないとなるとRZまでステルスで移動し、そこでファルコンの無線を使うか直接404小隊とやらと合流するか、どちらかしかない。

「9、戦えるか？ 同じ銃なら弾薬は少しは渡せる、RZまでのルートを辿り、小隊と合流しよう。」

ファルコンは404小隊と合流する方法を取る、恐らく傷の状態からして時間はあまり経っていないだろう、痕跡や指定されているであろうルートを辿れば合流できる筈だ。

「よし、急ぐぞ9、背中を任せるぞ？」

「…うん！任せて！」

UMP9とファルコンは行動を開始する、果たして無事に合流することはできるのか…。

—————

404小隊side

「9…無事で居て…」

ファルコンと9が行動を開始して数時間、ファルコン達が居た場所から数キロ程離れた薄暗い森の中を3つの影が疾走している、先頭に行くのは暗い茶髪に9とよく似た顔立ちの少女だった、その後ろを追従するのは銀髪にベレー帽を被った少女と白髪に帽子の様なものを被った少女だった。

「45！落ち着きなさい！このままだと鉄血の奴らにまたバレルわよ！」

「うう…待ってよお。」

45と呼ばれた少女は走るスピードを緩めず後ろの少女に振り返らず返事を返す。

「奴らに奇襲されて9が負傷したのよ！このままだと奴らに殺される！416！G11も早くしなさい！」

416と呼ばれた少女…HK416とG11は取り乱す45…UMP45に追いつき、その両肩を抑えつける。

「心配なのはわかるけど落ち着きなさいと言ってるでしょう！こんなんじや鉄血にバレて私達もやられるわ！少しは隊長として考えて行動しなさい！」

416が怒鳴ると45はハツとした表情を浮かべ苦虫を噛み潰したような顔になる。

「ねえ45、9とはぐれてまだ数時間もたつてないよね？ならばぐれた場所に戻った方が多分良いよ、それがグリフィンに救援を要請した方が絶対良い。」

「ええ、私もG11に賛成ね…ッ!?敵！10時の方向！複数よ！」

416が銃を構える、森の茂みからバイザーをつけ、SMGを持った黒や紫のカラーリングをしたアンドロイドが10体、飛び出して来た。

「くっ…敵の増援部隊ね！押し通るわよ！」

404小隊は黒紫のアンドロイド…「Ripper」との戦闘を開始した。

—————

「9、だいぶ近づいたと思うがまだか？」

「ちよつと待つてね…うん、この森を抜ければその先がRZだよ。」

ファルコンと9は森の手前で立ち止まり、ルートの確認を行う。

「よし、日が暮れる前に森を抜けよう、ん？銃声が聞こえるな。」

ファルコンのヘッドセットの集音マイクが銃声を聞き取る。

「この音だと…ケースレス弾?となるとG11か、随分変わり種の銃を使うな…それと、

45ACP弾か。」

音の周波数や、音の聞こえ方を分析しファルコンは銃の種類を予想する。長年の経験からすれば大まかではあるがこのくらいはできるだろう。

「9、恐らく戦闘が起きている、慎重に行こう…おい9!」

「きつと45姉だ!ファルコン!ごめん!先に行くね!」

ナインは弾かれた様に森走り出し、森の中へと行ってしまふ、慌ててファルコンも後を追いかける。

—————

「カバー!G11!援護して」

45が左側面のRipperの頭を撃ち抜き、G11へ指示を出すその声の一瞬後反対から飛び出して来たRipperが四肢と頭を撃ち抜かれる。

「45!どうする!?!敵の数がなかなか減らないわ!」

接近して来たRipperの首をナイフで切り裂き、蹴り飛ばした416が指示を促す、少し離れた岩陰から狙撃をしているG11も弾薬が残り少ないだろう、空になったマガジンが周りに散らばっている。

「チツ…弾幕を張りつつ後退!とにかく森を抜けるわ!」

「了解!」

ファルコン、9、到着まで後数分

「9！迂闊に飛び出して何のつもりだ！？また敵の待ち伏せを喰らうぞー！」

息を切らせながらファルコンは怒鳴る、仲間が近くに居るかもしれない、確かに急ぐ気持ちはわかるが今は敵地の真っ只中、これでは撃つてくれと言っている様なものである。

「ごめん…ッ!?ファルコン、あそこー！」

ナインが指差す先には9とよく似た少女に赤紫の人影が銃口を向けている光景が飛び込んできた。

「クソッ！間に合え…!!」

ファルコンはUMP9を構えその人影の頭部に狙いを付け、引き金を引いた。放たれた9mmパラベラム弾はその人影の頭を真っ直ぐに撃ち抜いた。

「ッ!?誰?」

9とよく似た少女は不意の銃撃に素早く反応し手に持つ銃…UMP45を構える。

「45姉！話は後！この人は私を助けてくれたんだよ！だから今は鉄血の殲滅に集中して！」

「9!?無事だったのね！兎に角きちんと説明して貰うわよー！」

45は9の姿に安堵の表情を浮かべるが次の瞬間には表情を引き締める、そして404小隊全員がRipper達を睨みつけ。

「虫ケラが…立ったまま死ぬ！」

「やつと何時もの45に戻ったわね、寝坊助！しっかり援護しなさいよ！」

「うう…：わかったよお…：いい加減寝たいし…」

そんな404小隊の面々を見て9もファルコンに声をかける。

「行こう！ファルコン！」

「ああ！」

もちろんファルコンも負けていない、UMP9をリロードし偶然か9とほぼ同じタイミングで同じ言葉を発した。

「俺（私）の行く道を邪魔するな！」

—————

9とファルコンの参戦で数で勝るはずの鉄血部隊は逆に蹂躪されていた、45が正確な射撃でRipperの急所部位である頭や胸を撃ち抜き、416は自分と同じ名のAR、HK416のアンダーバルルに装着したグレネードランチャーから榴弾を放ち、複数のRipperを吹き飛ばす。Gillはスコープを覗き、各々が仕留め損ねたRipperに確実にとどめを刺す。2人の参戦から僅か数十分で包囲していたRipper

r達は物言わずの鉄屑へと成り果てた。

「状況終了、皆、無事かしら？」

「ええ、大丈夫よ、完璧に仕留めたわ。」

45の言葉に胸を張りながら416は答える。

「何体か仕留め損なつてなかつ？」

「なんか言つたかしら？寝坊助。」

ボソツとG11が声を漏らす、それとほぼ同時に416はG11の頬を片手で抓る。

「ひやめてよお……イタタタ……」

416とG11のコントを横目に45はファルコンに向かい言葉をかける。

「9を助けてくれて感謝するわ、私はUMP45、404小隊の隊長を務めているわ、できれば仲良くしましょう？」

笑みを浮かべ、ファルコンへ握手を求め、その笑顔にファルコンはナニカを感じる。が今は向こうに合わせた方が良くと判断し差し出された手を握り返す。

「BSAAエコーチーム、コードネームはファルコン、自分こそできれば友好的にできればと思つている。」

2人は然りげ無くお互いの細部を観察する、一瞬ではあるがどちらも見たことの無い装備に、腕につけたワツペンと腕章、結論から言えばお互いに何もわからなかった。

「一先ずRZまで急ぎましよう、続きはグリフィンに帰還してからね。」

45の言葉にファルコンは了承の意を示す。

「わかった、だが、行ったらいきなり銃を突きつけられる様な事態は止めてくれよ?」

「おお!ファルコンも一緒だね!よし急ごー!」

ナインの笑顔を見て、ファルコンは416とG11の方へ歩み寄り。

「ファルコンだ、少なくとも道中足を引つ張らない様にする所存だ、よろしく頼む。」

ファルコンが416へ手を差し出し、同じく握手を求めらる。

「HK416よ、先程の戦闘の動き、見事だったわ。」

「G11だよ…お休みいゝ…」

強気な瞳を向け、差し出された手を握り返す416と立ったまま寝てしまいたいようになってるG11とも自己紹介を済ませ、5人は森を抜け、RZへと足を進めた。

—————

異世界へと足を踏み入れた誇り高き隼と存在しない部隊が出会う、そして隼と鷲の邂逅、少女が前線に立ち戦乱渦巻くこの世界、激化する鉄血との戦闘、隼と鷲、2人の猛禽がこの世界に降り立つ時、遂に歯車が動き出す、まるで待っていたかの様に、その結末は神のみぞ知るのかもしれない…

鷲と隼の出会い

P M C グリフィン & a m p ; クルーガー本社、其処は鉄血と人類の^{フロントライン}前線を支える巨大 P M C (民間軍事会社) の心臓部、その屋上へと向かうエレベーター内で2人の人物が会話を交わしていた。

「ヘリアン、A R 小隊の帰還はまだなのか？」

人間の、白髪混じりの男だ、それなりに歳を重ねているだろうがその肉体は鍛え上げられ、微塵の衰えを感じさせず、歴戦の雰囲気と漂わせている。

「はい、間も無くヘリで帰還することです、クルーガー社長。」

ヘリアンと呼ばれた女性、銀色の長髪、モノクルを付けた、赤い制服を着ている。

「そうか…しかし別の世界の人間とは、未だに信じられんな。」

クルーガー…本名をベレゾヴィッチ・クルーガー、グリフィン & a m p ; クルーガー (以降 G & a m p ; K) の創設者にして戦術人形の運用を確立し、G & a m p ; K を世界最大手まで成長させた男は顎髭に手を当てて考え込む、長年生きてきたがこのような事態は遭遇したことなど無い。

「失礼、クルーガー社長、404小隊から機密通信が、どうやら此方も異世界の人間と遭

遇したようです。」

追い打ちをかけるようなヘリアンの言葉にクルーガーは静かに頭を抱えた。

—————

イーグル、AR小隊 side

『間もなくG & amp; K本社に到着します。』

クルーガー達が頭を抱えている頃、AR小隊とイーグルを乗せたヘリは順調に飛行を続けていた。

「ねーねーイーグル。」

「なんだ、あー…SOPMOD II?」

長時間の移動で退屈になったSOPMODがイーグルへ声を掛けた。

「SOPで良いよーあのね、イーグルの世界って本当に鉄血とかわたし達みたいな戦術人形とか居なかったの?」

「ああ、そもそも戦術人形の様な高度なAIを搭載したアンドロイド自体架空の物のような扱いだっただけだから、どうやらこの世界は俺の居た世界よりも大分技術が発達しているらしい。」

イーグルの言葉にSOPMODはそっかーと返しながら自分の席に座り直す。

「しかし手錠も何も無しとは些か無用心じゃないのか? 装備も預かりになったのは銃く

らいだろう？」

イーグルは両手を広げてみせる、その手に嵌めているのはアンブレラの開発したタクトイカルグローブ、耐刃、耐衝に優れたケブラー繊維を使用し、ナツクルガードはカーボンテックファイバーでコーティングされていて、殴るだけでも相手にダメージを与えることができる、某BSAAのエースはそれでモルデッドを殴り飛ばしていたが…。

「抵抗する気などこの状況で起きますか？」

ARR15がその手に持つARRをちらつかせる。

「ジョークだ、流石にARRを持っていては敵わないからな。」

ニヤリと笑うイーグルに対し、ARR15も笑みを浮かべる。最初は警戒していたARR15もSOPMODⅡへのイーグルの対応を見て少しずつではあるが警戒を解いていた、メンバーの中で一番幼い性格であると同時に悪意などにはかなり敏感なSOPMODⅡが懐いているところを見ると悪い人ではないとわかっているからだ。

「しかし随分と重装備なんだな、イーグルはどんな部隊に所属していたんだ？」

M16がイーグルの横に置かれたマスクを持ちながら問う。

「ふむ…簡単に言うならば、君達の言う…E.L.I.Dだったか？それと似たような奴らの鎮圧を主にしていた部隊だな。」

「なんと、それならその重装備も納得です。」

「まあ、詳しくは君たちの本拠地についてからだ、そこで包み隠さず説明する。」

M4が感嘆の声を漏らすと同時にG&P;Kの本社が見え、全員が降りる準備を始めた。

—————

ファルコン、404小隊side

「ねー、ファルコン、どうしたらあんな動きができるの？人形の私達から見てもあそこまでの動きとかAIMは難しいと思うけど？」

「何、長いこと銃を握ってきたからな、それにあれくらいできなくては生き残れないような状況ばかりだったから自然と身についた。」

同じくG&P;K本社に向け飛行するもう一機のヘリの中で9がファルコンに問う、心なしか少し距離が近い気もするが…。

「こら9、あまり近すぎも良くないわよ。全く…寝坊助に至ってはファルコンの膝で寝てるし…。」

ジロツと睨む416の視線の先ではファルコンの太腿に後頭部を乗せ、アイマスクをつけながら寝息を立てているG11が居た、本人曰く「ファルコンの服の触感が枕にピッタリ」とのことらしい。

「悪いわね、ファルコン、ウチのG11が迷惑をかけて。」

45の謝罪の言葉にファルコンは軽く手を振り。

「別に構わないさ、まだ子供の頃、いつも年下の奴等にはこうやってたからな。」

G11のほつぺたを軽く指でつつきながらファルコンは笑みを浮かべる、そこに下心は全くなく、慈しむような笑みにバラクラバを外したファルコンのどこか儂げな印象の素顔も相まって、近くにいた9はもちろんのこと45と416の2人も軽くドキツとしてしまった。

「ほ、ほら！本社が見えてきたわよ！全員降りる準備をして！」

「え、ええ！ほら寝坊助！起きろ！」

「痛い！うう…：わかったからそんな強く叩かないでよ…。」

どこかグダグダし始めた404小隊の面々にファルコンは疑問を浮かべる。そんなファルコンに9が小声で囁いた。

「ファルコン…：すごいね、45姉をあんなに取り乱せられるなんて。」

「待て待て、なんで俺の脇腹を抓るんだ。」

「さあ〜なんでだろうね〜？」

そんなやりとりの中5人を乗せたヘリもG&a m p ; K本社に到着した。

—————

N O s i d e

G & a m p ; K屋上へリポート、現在そこは途轍も無く険悪な雰囲気が出ち込めていた。

「いきなり随分なご挨拶だな？ B S A Aはいつからサイコパス集団に成り果てた？」

自身に向けられたナイフをグローブで受け止めながらイーグルはマスク越しにファルコンを睨む。

「黙れ……この世界でもアンブレラが存在しているということは又惨劇を繰り返すつもりだろう！ その傘が何よりの証明だ！」

始まりはA R小隊と404小隊にとって見慣れた光景からだった、416がM16に突っ掛かり、それを諫めようとしたファルコンがイーグルの右肩に縫い付けられたワツペンを見た瞬間、ナイフを抜き放ち、イーグルに襲い掛かったのだ。

「お前の言うアンブレラが俺の知ってるアンブレラならもう赤い傘旧アンブレラは存在しない、さっきも言ったがB S A Aならそれくらいは知っている筈だ。」

「何を世迷言を……傘の色を変えたくらいでお前達が犯した罪は無くならないぞ……俺のようやくできた家族を奪ったあの時のように……！」

ファルコンの慟哭にイーグルも共鳴するかのようにマスクを取り、声を荒げた。

「家族を奪われた……か、それは此方も同じだ！ 俺達、新生アンブレラはその贖罪の為に戦っている！ 俺は旧アンブレラの人間だが、俺が旧アンブレラの犯した罪を知った時は

その罪を償おうとする者は俺も含め沢山居た！俺も目の前で両親や仲間が食い殺された！テメエだけが苦しみを背負っている訳じゃないんだぞ！」

益々ヒートアップする2人に先程までM16に突っ掛かっていた416もその怒気に思わず身がすくみ、慌てて止めようとしたM16はイーグルの言葉に思わず声が詰まってしまった。

「随分と騒がしいが何かあったのかね？」

消して大きくはない、しかし威厳のある声が響く、AR、404両小隊が声のした方向を見るとそこにはクルーガーがヘリアンと共に此方に歩いてくるところだった。

「ふむ…」

クルーガーは一息つくくと最早インファイトにまで発展し始めたイーグルとファルコンを見やる。

「そこまでにしておけ、これ以上この場を騒がすなら此方も考えがあるぞ？」

クルーガーは警告するが冷静さを失った2人は聞く耳を持たず、クルーガーへ怒鳴り返す。

「関係ない奴が口を挟むな！」

イーグルは右ストレート、ファルコンは左フックをクルーガーへ繰り出す…が
「ふん、こそばゆいな。」

「!?!」

なんとクルーガーは身動き一つせず、2人のパンチをその身に受け止めたのだ、信じがたい光景に2人は一気に熱が冷め、冷静さを取り戻した。

「さて、落ち着いたかな？」

苦悶の声も上げず、クルーガーは2人を諭す。

「ツ…申し訳ありません、関係ない貴方に手を出してしまつて…」

「此方もです、増してや助けて頂いた貴方達に迷惑を掛けてしまいました…」

2人は深く頭を下げ、クルーガーは頷くとヘリアンに目配せをし、この場は任せて欲しいと伝えた。

「畏まりました、AR小隊、404小隊は各員補給を済ませ、今回の件を纏めるよう、後に改めて今後の指示を出す、それまでは各員待機するように。」

クルーガーとヘリアンの雰囲気を感じてかAR小隊、404小隊の面々は敬礼をする
とそれぞれの宿舎へと向かった。

「さて、事情を説明して貰えるかな？異世界からの客人？」

クルーガーの言葉に2人は大きく頷いた。

N o s i d e

「成る程、バイオテロにB S A A、それにアンブレラ社…すまないな、どれも聞いた事がないし過去のどの文面にも記録がない。」

場所をグリフィン本社、クルーガーのオフィスに移し、イーグル、ファルコン、クルーガーの3人は早速お互いの状況を話し合っていた。

「此方はまず2060年の地球がこの様な惨状になつてるのが信じられません…それに1905年のコーラップス…この様な代物はどの国から見つかつてはいません。」

デスクの上に置かれた資料の中の年表を見ながらイーグルが声を出す、そしてファルコンはイーグルへ声をかけた。

「イーグル、お前の言うことを聞いているとどこか俺とも食い違いが無いかな？」

「…嫌な予感がしなくも無いんだが、ファルコン、お前が死んだのは何年の何月何日だ？」

面倒な事になると確信しながらイーグルはファルコンへ尋ねる、クルーガーも顎に手を当てながら聞く。

「西暦2013年、6月30日だ、場所もはつきり覚えている、中国、ターチイだ。」

ファルコンの言葉にイーグルはC—Virusのあの事件か…と小さく呟き、口を開

いた。

「ファルコン、俺は2017年12月14日に死んだ筈なんだ、そして此処からが肝心だ、俺はクリス・レッドフィールドにも会った事がある、そしてレッドフィールドからはお前の様な存在は聞いた事が無い、しかしC-Virusのあの事件は起きている、そうなるよ…」

イーグルの説明に被せるように話を聞いていたクルーガーが口を開いた。

「パラレルワールド…平行世界か？」

クルーガーの確信した意見に二人も同意する、その見解が一番辻褄が合うからだ。そしてクルーガーは2人にある話を持ちかける。

「ふむ、二人は実戦経験は有るな？」

クルーガーの言葉に二人は勿論有ると答える。そしてクルーガーの口から出た言葉は…

「我がG&Amp;P.Kの戦術人形、及び新任指揮官の練度向上、そして戦術人形を率いる指揮官として鉄血と戦っては貰えないだろうか？」

なんとクルーガーが頭を下げ、2人に戦術人形を率いる指揮官、並びに教官になつて欲しいと頼み込んだ。

「…身元もハッキリしない、それも初対面で殴り掛かった怪しい人間2人にその様な事

を頼むとは思いませんでした……」

「何か理由でも有るのですか？クルーガー社長。」

2人は当然訝しむ、いきなり指揮官になって欲しいなどと普通ならばあり得ない事だ。

「現在、我が社に所属している指揮官は実戦経験が十分な者は少なく、殆どが民間人上りの者が多いのだ、故に着任して早い段階で殉職してしまう指揮官も少なからず居るのだ、少しでも犠牲を減らす為にも是非君たちに指揮官になって欲しい。」

クルーガーの言葉に2人は迷わず返答を返す。

「此方こそ、助けて頂いた恩もあります、その件、受けさせて下さい。」

「……ありがとう、君達のG & amp; K指揮官就任を心より歓迎する。」

2人は敬礼をしクルーガーと固く握手を交わした。